

コラム

〈腰折れ文〉 三、

渡邊澄子（会員）

◆樺太旅行◆

三回続いて協会企画の旅行参加話とは芸がなさ過ぎるが、今

回の旅は私にとってわくわくの旅だった。これまでを振り返ってみると学会発表や日本文学教授のためが多いが、随分多くの国に行っている。にもかかわらず、あの素晴らしいロシア文学の国にはまだ行っていなかったのだ、たとえ、これがロシアだ！と言

える中心地ではなく、樺太と呼ばれた日本領だった北緯50度以南のロシアのほんの先っぽだろうとも、ロシアの臭いをかけ、日本近代文学作家達が手本としたチエホフと縁もあり、好きな作家李恢成の生まれ育った真岡を歩けることの嬉しさで心が弾んだ。たった六日間の旅だが感

概無量のこと多く、書きたいことは山ほどあるがそれは無理。特に思いの深かったことのみを記しておきたい。

海沿いを走ることが多かったが、海岸線は美しくまさに絶景。交通量の少なさも驚きの一つ。オリガさんのガイドは行き届いていてありがたかった。琥珀の粒がみつかるという海岸に目を奪われていたら、あそこにアザラシと声をかけられた。ほんとにアザラシ！アザラシの群に出会えるなんて、これは幸運だったのだろうか。興奮した。

北海道は不漁とのことだがここでは鯨・鱈・鮭・烏賊・蟹など豊漁でいくらも蟹も呆れるほど安い。見とれていたら路傍で売っていたおばさんが、たらば蟹の足を御馳走してくれた。おいしい！買って帰りたいがダ

メ。鯨と鮭の燻製を買う。研究者仲間達へのお土産にと文房具店を捜してもらったが、やっと見つけた専門店だったのに、品種も品質も日本よりはるかに劣っていて買うメリットなくがっかり。オリガさんと運転手さんのお子さんへのプレゼントを買っただけ。

日本統治下の樺太は王子製紙の独擅場だったのでろうか。戦後七十年も経ちながら、随所に巨大な王子製紙工場跡の残骸が往事の繁栄ぶりを誇示するかのように残されている。搾取されながらも王子製紙で働くことは自慢だったのかもしれないが、敗戦時は随分辛かっただろうと想像してしまふ。それにしても、残骸化して朽ちるに任せているのはなぜだろう。土地の所有権はどうなっているのだろうか。

街全体が王子製紙で成り立っていたことを示すかのように王子製紙関連の立派な建築物が再利用されている。だが、それどころではなく言葉を失ったのは、随所にみら

れたトーチカや神社の鳥居跡や手水鉢や狛犬が荒廃してはいるが残されていたことである。さらに息を呑んだのは奉安殿が幾つも残っていたことだ。奉安殿がなぜ？無数の犠牲者を出した戦争の源なのに。雑草に埋まった石段を登った小高い山の上にあるのは何故？あの時代を忘れないため？それとも大日本帝国が消滅しきれていないのか。戦争の出来る国に向かってひた走る安倍政権の現況に怯えている私は胸が高鳴り夢中で登って、雨宮さんに呆れられた。

ロシアに行ってきたなんて大袈裟なことを言えるような旅ではなかったが、私にとっては意義ある旅で最高の収穫は、「負」の歴史遺産に真向かえたことだろうか。

◇「腰折れ文」とは拙い文章の意味です。『源氏物語』の「帚木」の巻で使われています。

◇9月号の（一）で女神湖まで往復350^キと書きましたが片道280^キ、往復560^キでした。